

第101回日本外科学会総会

—低侵襲手術への挑戦 心臓・呼吸器・縦隔について—

田 林 暁 一*

本シンポジウムでは呼吸器・縦隔・心臓血管疾患に対する低侵襲的治療法の現状および将来展望について討論された。本シンポジウムの主題に関連して、呼吸器・縦隔分野での今回の発表で注目されるテーマは、1) 内視鏡外科の応用、2) 悪性腫瘍、特に原発性肺癌におけるリンパ節郭清の省略化といった内容であった。原発性肺癌に対する胸腔鏡手術法の展開については手術時間、出血量、術後サイトカインの変動、疼痛スコア、入院日数といった面に関して転移性肺腫瘍および原発性1期肺癌症例を対象に標準的開胸手術との比較が行われ、前者では出血量、手術時間、術後在院日数、血中IL-6が胸腔鏡群で少なく、後者では術後疼痛、血中IL-6が胸腔鏡群で少ないことが示された。また予後の面でも胸腔鏡下肺癌手術の成績は標準開胸を上回る5年生存率が示されたが、このことは大変興味深い治験結果であった。重症筋無力症例に対する鏡視下拡大胸線摘除術に関して、胸部小切開法の報告があったが、美容上および低侵襲の面で優れていることが報告された。一方、2)に関連したsentinel node navigation surgeryは肺癌においてその研究が始まったばかりの状況であり、動物実験における成績が提示された。現時点での結論としてsentinel nodeは末梢小型肺癌への応用が可能で、色素法とRI法との併用により同定率が高まる事、sentinel nodeが陰性の場合、他リンパ節への転移は確実に陰性が期待される事が明らかとされた。その他縦隔疾患、殊に重症筋無力症例への応用に関して新しい術式の開発の面から興味深い内容が提示された。

心臓血管外科分野では拍動下冠動脈バイパス術、Port access法による心臓手術、ロボット支援下冠動脈バイパス術、大動脈瘤に対するステントグラフティングの発表があった。拍動下冠動脈バイパス術の臨床応用は急速な勢いで拡がっており、それとともに種々の器具の開発も目ざましいものがある。本シンポジウムではわが国で考案開発され、臨床応用されたdoughnut stabilizerに関して発表があったが、固定性、静止野確保に関して有用性が高いことが示された。

Port access法による心臓手術症例も次第に増加してきており、最近では適応範囲も拡大されてきている。本法の今後の発展に関しては低侵襲性と相反する面もある安全性、手術成績の面から検討される必要があることが討議された。ロボット支援下冠動脈バイパス術はわが国での臨床応用例がほとんどなく、今後の大きな課題の一つである。欧米では本術式の臨床応用が増加してきており、わが国でもロボットシステムが導入された施設が数カ所あることから、今後さらに臨床応用が増加することが考えられた。しかし、解決すべき種々の問題点が残されており今後さらに検討していく必要があることが討議された。

胸部および腹部大動脈瘤に対するステントグラフティングは低侵襲であることからその適応も拡大され、急性大動脈解離例でも安全に使用できることが報告された。本法の今後の最も大きな課題は遠隔成績であり、人工血管置換術とのrandomized studyを考慮に入れた検討の必要性などについて討論された。

近年、患者のQOLを向上させ、手術のリスクを軽減する目的で呼吸器、縦隔外科および心臓血

*東北大学大学院医学系研究科心臓血管外科

管外科分野における種々の低侵襲手術が応用され、その適応の拡大も試みられており、用いる機器、手段などについても進歩がみられてきた。今回のシンポジウムでは上述の分野の低侵襲手術の最前線と、今後の課題について発表していただき、今後の低侵襲手術の道標となるような大変意義のあるものであった。低侵襲手術が拡大し、その成績が安定化することによって多くの症例に多大な恩恵をもたらすことになるので、今後益々この方

面の研究と臨床応用が進捗していくことは有意義なことと思われる。ただし、本法が進歩するあまり、いわゆる従来から施行されてきた手術方法を経験する機会が減少することが予想され、今後の呼吸器外科、心臓血管外科医の育成の面で考慮する必要がある。本法は定型的手術法の基に成り立つものであることを再確認し、そのような教育カリキュラムの構築を考えていくことが重要であると思われる。